解説してもいいのではないか、どこかで青年研究の先行研究をフォローしてもよかつたのではないかなど幾つか注文もあるが、初出掲載雑誌の性格から考えてそれは無理な注文かもしれない。しかし、本書に収録するさいに若干の補足を加えて欲しかった。さらに、ないものねだりをすれば、団塊世代の親の類型化と親子のディスコミュニケーションについての分析が欲しい。〈世間〉的共同体を「友達親子」という幻想的モデルで補完しようとした団塊世代の親と、現実的な団塊ジュニアという断絶した関係の分析が興味深いだけに、「友達親子」のパターンと断絶の仕方の分析が欲しかった。なぜなら、若者の人格類型で著者が示した「バンカラ風さわやか人間」に当たる「友達親子」関係がありうるかもしれないからだ。「だからどうだ」と著者は言うかもしれない。だが、本書を読み終えた読者の多くは、著者の意図とは別に、おそらく断絶の仕方にパターンがあり、そこに解

決の糸口があるのではと感じてしまうからだ。たとえそれが無駄に終わるとしても。

本書には、冷静な分析と同時に火傷しそうなほど熱い著者の気持ちが伝わる箇所がたくさんある。そこには途方もない時間と労力が費やされているはずである。しかし、それを感じさせない。ブルセラ女子高生、テレクラ女子高生という特別な事例を取り上げていること、本書で使用された質問紙調査の対象者が大学生に限定されていることなど、幾つか批判があるかもしれない。ただ、そこから現代青年の姿、現代社会の一面が見事に浮かび上がってしまうのが、現代という「時代性」であろう。著者は、現代という時代の一面を確実にその手につかんでいる。いま若者に一番近い社会学者だと思う。今後、このような研究が多数登場することを期待したい。

◆四六判 286頁, 1700円
講談社

■ 書 評 ■

鐘ヶ江晴彦・広瀬裕子 編著

『セクシュアル・ハラスメントはなぜ問題か』

—現状分析と理論的アプローチ—

京都女子大学 森 繁男

「セクシュアル・ハラスメント」は一般に「セクハラ」と略称され、「性的いやがらせ」と訳される。「いやがらせ」とは「相手のいやがることを、わざわざ言ったりしたりすること」(広辞苑)であるから、「セクハラ」は倫理に照らしても「悪いこと」である。でも自分はそのような

ことなどした覚えもないし、また職場で頻発しているとも思えないのに何故それが「問題」になるのか。女性の「被害妄想」ではないのか。——これがほとんどの男性の「本音」であろう。

しかしながら、わが国でも働く女性の7割もの人々がこの種の「ハラスメント」

を経験したり感知したことがあるという(本書第1部)。本書のタイトルにある「なぜ問題か」という問いかけが改めてなされなければならないことの前提にはこうした男性と女性の「認識のずれ」があることは確かであろう。だからといって個々の男性の倫理意識の低さを指摘したところで「問題」が正確に把握されたことにはならない。重要なことは、このような「ずれ」がなにゆえに生じるのか、その結果女性はどのような「痛み」に耐えてきたのか、そしてそれらのことがいったい何を意味しているのか、を本質的に理解することなのである。本書はそのために実証的データを示し、日本における「セクシュアル・ハラスメント」(以下ではS・Hと略記する)について(主として社会学の視点から)理論的な考察を試みたものである。

さて本書は、編著者らの4年間に及ぶ共同研究のまとめとして世に問われているが、全体は調査データの報告と解説からなる第1部と6人の著者が個別に理論展開をおこなった第2部に分かれている。以下にそれぞれの知見を評者なりに要約してみることにする。

第1部の報告からは、日本の職場ではアメリカ以上にS・Hが多発しており、また起きやすい構造があることがわかる。ここでは「当人が望まない、不快だと感じる性的言動」という、1980年のアメリカ雇用平等委員会(EEOC)が提出したガイドライン以来の「被害者の感じ方」を重視した調査結果から現状を分析している。それによると、わが国では「言葉」「接触」「サービス強要」などの比

率が高く、その多くは男性の上司や先輩から20代女性への「地位利用型」ハラスメントである。その背景には、女性を職業人としてよりは男性への奉仕者として見るような「性差別」があり、また日本特有の「集団主義」的な職場構造がその告発を抑止しているという。

第2部第1章では、1970年代後半よりのアメリカにおけるS・Hに関する社会学的研究を紹介している。そこには、S・Hを自然な性的引きつけ合いの現われとみる「自然/生物学的モデル」、仕事役割と性役割の混同から説明する「性役割のあふれ出し」理論、組織における男女間の権力構造に起因するとみる「組織的モデル」、資本主義の家父長制化の結果とする「社会文化的モデル」など、さまざまな立場があるが、最近ではS・Hを総じて「性差別」とみる傾向にあるという。

第2章では、S・Hの基本構造とその日本の特質を論じる。著者はまずS・Hを「公的領域での人間関係を背景にしたセクシュアリティに対する侵害」と包括的にとらえ、受け手の抱く不快な感情を「ことば化」したことにその意義を見出す。またS・Hは、女性をセクシュアルな存在と見る社会規範、職種や地位の男女分化、男性の攻撃性に対する社会的容認などによって培養され温存されるが、日本ではこれに加えて「企業一家」的な職場体質の中で女性を「潤滑油」として扱う慣行があるために公私の区別があいまいになりやすく、地位権限を利用した「性役割強要型」のS・Hが原型となると述べる。

第3章では、S・Hを研究者ではなく経験の主体である女性たちの認識からとらえていくべきであると主張する。その限りにおいてS・Hは「性差別」というよりも、家父長制に基づく男性の女性支配を可能ならしめる「暴力の連続体」の中に位置づく。すなわちS・Hは「レイプ」などと同じ地平にある「女性に対する構造的暴力」であり、女性の「性的自己決定権」の侵害であると断ずる。

第4章では、「S・Hの社会問題化」が「性行為への意思」に関する女性にとって理不尽な(=「性差別的な」)行為解釈装置(=性規範のダブルスタンダード)に変更を加えたのであると評価する。S・H事件の裁定報道は、「性行為の強要」に対する「服従」が労働の場においては必ずしも女性の「意思」として解釈できないことの正当化、すなわち女性の「労働権」と同時に「性的自己決定権」をも社会的に承認させるための戦略として寄与するというのである。

第5章では、S・Hを「強姦」や「地位利用による性交の強制」などと区別して、「見られる」「言われる」のような「性に関わる公認されていない被害(悪)」として定義し、社会的に言語化すべきであると説く。なぜならそれらは、われわれがいまだ十分に「近代的」ではないこと、つまりは「個人の尊厳」や「企業の合理性」という考え方の不徹底によるものであるから。

最後に第6章では、S・Hを「性差別」の概念から区別することを提唱する。「近代の平等思想に照らして認識された生きにくさ」と著者が定義する「差別」

の「不当性」からS・Hを説明することは、マジョリティーに対する告発という戦略上の有効性はあるものの、予想されるS・Hの様々なバリエーションには対応できない。むしろ今まで注目されてこなかった「人のセクシュアリティを傷つけるような行為」の不快感・社会的不当性を認知させるところにS・H概念の独自性がある。ただそれだけにS・Hは、双方の主観の「ずれ」やセクシュアリティの「軋轢」などの難しさが伴うのだ、という。

このように本書を読み進めてくれば、もはやS・Hが「個人倫理」の問題でないことは明らかだ。それぞれの著者の問題関心は必ずしも同一ではないが、本書の全体を貫いている基本視座は、S・Hが「性的自己決定権」の公的な侵害という厳然たる「被害」でありながら、主体性の軽視や公私の混同といった不十分な近代化にとどまっている「社会構造」「組織特性」のゆえに正当に認知されてこなかった、というところにある。そのような意味でこそS・Hは「問題」なのであり、またそういう問題なのだ(主として男たちに)意識されていないことが「問題」なのである。であるからこそ「被害者の感じ方」を唯一の根拠として「言語化」していくことの重要性が繰り返して語られる。こうしてS・H概念の意義は「いまだ公認されざる性的被害」の確定に求められることになる。

評者もそのこと自体に異論はないし、さらにより広範に認識されて然るべきであると考え。また、各著者の精緻な論理を通じて啓発されたことも多く、その

書 評

真摯な学問的姿勢に対して敬意を表するものである。しかしながら、本書を読了してますますS・H問題の難しさに思い至った、という感も否めない。これはおそらく「おわりに」の著者が「一筋縄で行かない部分」と述べていることであろうし、疑問というよりも後続する研究への課題と考えたい。

その一つは、「セクシュアリティ」なるもののとらえどころの難しさである。それはただ単に「被害」の認定をめぐる「主観と客観の線引き」や「主観と主観のずれ」のみの問題ではない。セクシュアリティが常に「自己決定」可能なかたちで「主体」の中に存在する「自明」のものかどうかという、「近代個人主義」的な背後仮説の確証性に関わる問題でもある。セクシュアリティ自体が多分に状況や自他関係の関数であるとすれば、その「侵害」としてのS・Hもまたそれらの関数であることを免れ得ない。「公私の区別」についても同様であろう。

いま一つは、S・Hと「性差別」(女性差別)との異同を考える難しさである。

むしろ本書の議論の焦点はここにあると思われるが、現時点でS・Hは家父長制や集団主義を背景とした「女性差別」(あるいはより深刻な「性暴力」)として現象していることは確かであろう。ただ評者はこれを「セクシュアリティの侵害」として一般化することの意義を積極的に評価したい。なぜならそこには「男女」の二分法で語り尽くせない現代のセクシュアリティを社会的な文脈で扱うこととの接点が見出せるからである。

いずれにしても本書は、ジェンダー研究の領域に「人権」を結節点として「セクシュアリティ」と「組織」との関わりを問う道を開いてくれた。さしずめわれわれとしては「教育」の場を中心にこの研究に続くべきであろう。そういった意味でも本書の著者たちは、編者が危惧する「ドン・キホーテ」には決して見えない、ということだけは明言しておきたい。

◆四六判 280頁, 3090円
明石書店